

大学生におけるsense of coherenceとアタッチメント・スタイル および知覚されたソーシャル・サポートの関連

岩崎 眞和*, 五十嵐 透子**

(平成22年6月18日受付, 平成22年12月3日受理)

Relationships among university students' sense of coherence, adult attachment styles, and perceived social supports

IWASAKI Masakazu *, IGARASHI Toko **

The purpose of this study is to examine the relationships among university students' sense of coherence (SOC), adult attachment styles and perceived social supports. Data were based on three questionnaires filled out by 490 undergraduate students (228 males and 262 females). The results were as follows. First, those who had a relationship with a girlfriend/boyfriend and/or a grandparent(s) as a social support network showed a higher SOC. Secondly, secure attachment style was positively related to SOC, whereas insecure attachment styles – especially ambivalent attachment style – were negatively related to SOC for both gender. Finally, perceived emotional supports from friends were positively related to SOC for the men, and perceived emotional and instrumental supports from family members were positively related to SOC for the women. These results suggested that the development of SOC would be facilitated by current supportive interpersonal relationships among university students.

Key Words : sense of coherence, adult attachment style, perceived social support, university students

I 問題と目的

現代社会において、人々は突然の事故や自然災害といった偶発的かつ強度のストレスフルな体験だけでなく、Holmes & Rahe⁽¹⁾の社会的再適応評価尺度に挙げられているようなさまざまなストレスに直面しながら日々の生活を営んでいる。そのなかにあって、同じストレスを体験しても、心身の健康を害する人々がいる一方で、効果的に対処し心身の健康を保持するだけでなく、その経験を自己の成長や成熟の糧として生きていく人々がいる。しかし、後者の人々に焦点を当てた研究は少なく、十分に検討されてこなかった。

1970年代から1980年代にかけて、「何が人を健康にするのか?」「人の健康を保つ要因は何か?」という問いの解明に向け、イスラエルの健康社会学者であるAntonovsky⁽²⁾が、健康障害の発生や増悪の要因となる危険因子 (risk factors) の除去と軽減を重視した“疾病生成論 (pathogenesis)”に対し、過酷な経験や逆境へ効果的に対処し、健康の回復や維持・増進に関与する要因 (salutary factors) の支援や強化を重視した“健康生成論 (salutogenesis)”を提唱した。Antonovskyが健康生成論

を着想した背景には、第2次世界大戦のさなかナチス政権下のドイツで16-25歳時に強制収容所での生活という極度にストレスフルな経験を強いられながらも、生還後は心身共に健康的な状態を保っていた女性たちの存在や、戦争によって年単位におよぶ長期間の難民生活を強いられながらもなお良好な健康状態にあった人々の存在がある。彼らに共通するポジティブな側面に着目した研究を進めるなかでAntonovskyによって理論化された健康生成論は、WHO (世界保健機構) の提唱したヘルス・プロモーションの哲学的な基礎理論として高く評価されているだけでなく⁽³⁾、人間が持つ“強さ (strength)”や“長所 (virtue)”といったポジティブな資質や特性に注目し、近年急速に研究が進んでいるポジティブ心理学の領域でも中核を担う理論とされている⁽⁴⁾。

さらにAntonovsky⁽⁵⁾は、健康生成論の中核にストレス対処と健康状態の保持に関する能力として“sense of coherence” (以下、SOCと略す) を見出し、hardinessやresilienceといった他の類似概念と比較検討をした上で、尺度化を行った。SOCは、自分の置かれている状況について見通しをもって理解できるという“把握可能感

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

** 上越教育大学 (Joetsu University of Education)

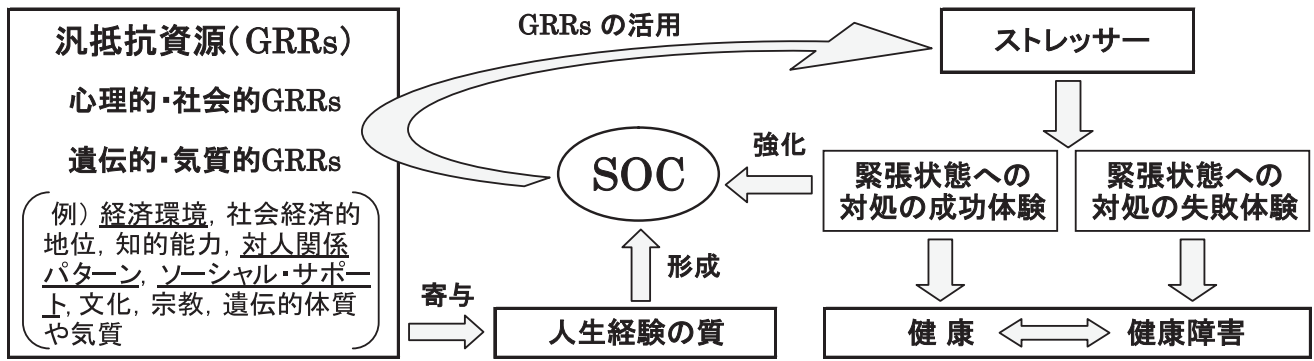


Figure 1 健康生成論を参考に、臨床心理学的概念を用いて簡略化した概念図

注) GRRsで本研究の焦点となった要因に下線をつけた。

(comprehensibility)”, ストレッサーに対してさまざまな資源を活用しながら何とかやっつけていける・何とかなるといふ“処理可能感 (manageability)”, 日々の営みや生きていくことにやりがいやポジティブな意味を見いだせるという“有意味感 (meaningfulness)”の3要素から成る概念である。さらにBecker⁽⁶⁾は、Antonovskyが一般にも理解しやすく平易な表現を目指していたことや、英語圏において“coherent”が“makes sense (意味をなす)”の同意語として頻繁に用いられていることを踏まえ、SOCをストレス下において、自分の置かれた状況を“理解できるか”“対応できるか”そしてそれらを通して“意味ややりがいを感じるか”という3つの要素から成るとした上で、“日常生活や人生に意味があると思える感覚”や“意味感”と、より平易な言葉で表現している。

Antonovsky⁽⁵⁾が作成したSOC尺度は現在までに世界各国で計30以上の言語に翻訳され、日本でも山崎⁽¹³⁾が日本語版SOC質問票29項目版(以下、邦訳版SOC-29尺度と略す)を作成している。SOCの概念化および尺度化により健康生成論に基づいた実証研究の蓄積が進み、欧米を中心に医学、公衆衛生学、看護学、社会福祉学、教育学、そして心理学領域などの対人援助領域において研究が行われている^(6,8,9)。しかし、身体的(生物的)・心理的・社会的側面における健康や適応状態に対するSOCの機能や効果は明らかにされてきてはいるが、SOCの発達に関しては十分に解明されているとは言い難く、SOC研究における今後の課題であると指摘されている^(5,9)。

SOCの発達を促す資源であり、ストレスラーにより生じた“緊張(tension)”に対処する際に活用される“汎抵抗資源 (generalized resistance resources)”(以下、GRRsと略す)は、主要な養育者とのアタッチメントの形成や関係性、および家庭環境に負うところが大きいことが指摘されている⁽⁵⁾。ストレスラーに直面した際にGRRsを活用して効果的に対処できたり、成功体験を積み重ねることでSOCが発達するため、豊富かつ良質なGRRsを有していることがSOCの発達にとって重要と考えられる。た

例えば、普段からソーシャル・サポートを多く知覚し、困ったときには支えてもらえると感じている人ほどSOC得点が高くなる傾向が国内の実証研究でも報告されており⁽¹⁰⁾、Antonovsky⁽⁵⁾の理論が支持されている。以上のことから、主要な養育者や家族以外も含めた重要な他者との相互作用によって形成される対人関係パターンや環境に対する認知的枠組みとSOCとが関連していると推測される。

これらの関連を明らかにするために、成人期における対人関係の質に関するさまざまな要因のなかでも、乳幼児期の親子関係を説明する際に用いられてきたアタッチメント理論を成人期の対人関係パターンに適用した“アタッチメント・スタイル (attachment style)”と、SOCだけでなくアタッチメント・スタイルとも有意に関連している“主観的に知覚されているソーシャル・サポート (perceived social support)”(以下、PSSと略す)⁽¹¹⁾を“心理社会的GRRs”と位置づけ、SOCとの関連性を検証することとした。Antonovsky⁽⁵⁾の提唱した健康生成論の概念図に加え、本研究で焦点を当てる要因を合わせてFigure 1に示した。

アタッチメント・スタイルは他者(主に、養育者)との継続的な相互作用のなかで、他者が自分を受け入れてくれるかどうか、自分に応答してくれるかどうか、また、自分は保護や注意を払ってもらえるだけの価値があるかどうか、といった自己や他者に対する信念や期待の発達に伴い、成人期における対人関係パターンの原型となるといわれている^(11,12)。したがって、個人がどのようなアタッチメント・スタイルを発達させているかということは、GRRsに含まれるソーシャル・サポートをどのように知覚したり活用できているのか、そしてそれらを活用することでストレスラーに効果的に対処できているかということと有意に関連していることが考えられる。たとえば、個人にとって危機的な状態に直面したときでも、“安定型”のアタッチメント・スタイルであれば、ソーシャル・サポートをより豊富に知覚しやすく、

さまざまなストレス場面に応じて適切な援助を求めることでストレスに効果的に対処できる経験が増え、SOCの発達も促進されると推測される。一方、“回避型”や“両価型”のアタッチメント・スタイルの場合は、ストレス状況下でも他者と距離を置くことでサポートや援助を求めにくかったり（回避型）、サポート希求や親密さに対する強い欲求を抱きながらも他者からの応答性への信頼感が乏しかったり、両価的で拒絶されることへの不安が高い状態にある（両価型）ことで、いずれもストレスへの適切な対処が困難になり、結果的にSOCは低くなることが考えられる。

また、PSSもSOCと有意な正の関連を示すことが報告されているものの⁽¹⁰⁾、“情緒的サポート”や“手段的サポート”といったサポートの種類によってSOCとの関連に差異がみられるのみに着目した国内研究は少なく、十分に実証されているとは言い難い。Antonovsky⁽⁵⁾は、頼りにできる人や、自分を認め信頼し大切に思ってくれる人を“信頼のおける他者 (legitimate others)”として、SOCを高める重要な存在と位置づけている。したがって、PSSとSOCとの関連を検証する際には、サポート源とサポートの種類を踏まえて分析することで、“誰からによる”（サポート源）“どのような”（サポートの種類）ソーシャル・サポートがSOCと有意に関連しているのかが明らかとなり、SOCを高めるための有効な働きかけや対応への示唆が得られると思われる。また、近年インターネットや携帯電話の急速な普及によって、ネット掲示板やe-mailのやり取りのみの友人も含めれば個人を取り巻くソーシャル・サポート・ネットワークは以前よりも拡大していると考えられるが、誕生時より密接な関わりのある他者の存在がSOCを育むのに重要とされることから⁽⁹⁾、本研究では研究協力者の原家族メンバーを対象とした。

さらに、2004年以降の国内のSOC研究の領域や研究対象をみると、公衆衛生学や看護学領域における研究が多く、看護師や看護学生、身体疾患や難病を抱えた人々、妊産婦、高齢者などが対象者の半数以上を占めていたが⁽⁸⁾、近年はアナログ研究の対象として大学生のSOCに関する研究の蓄積も行われている^(8,10)。

以上の点を踏まえ、本研究ではSOCの発達において重要な時期とされる成人前期の大学生を対象とし、健康生成論からSOCとの関連が推測されるアタッチメント・スタイルとPSSに加えて、国内外の先行研究でSOCとの関連が示唆されている経済的要因との関連性についても検証することとした。世帯収入が多く経済的余裕があるほどSOCが高まりやすいといわれているため^(5,9)、大学生を対象とする本研究においては、彼らの経済的余裕を反映する具体的な指標として居住費や学費以外で自由に遣える1ヶ月分の金額を訊ね、その金額とSOCの関連を検証

することとした。

本研究の1) 目的, 2) 仮説, 3) オリジナリティについて、以下にまとめる。

1) 研究目的

大学生を対象に健康生成論からSOCとの関連が推測されるアタッチメント・スタイルとPSS、および代表的なデモグラフィック要因との関連性を検証することにより、SOCの発達に寄与する要因の解明と、SOCを高めるための関わりや、教育実践、介入プログラムの開発に向けた基礎的な知見を得る。

2) 研究仮説

主要な養育者や家族以外も含めた重要な他者との相互作用によって形成されるアタッチメント・スタイルやPSSが、SOCと有意に関連していると推測される。具体的には、アタッチメント・スタイルが“安定型”であれば、PSSとSOCが共に高く、逆にアタッチメント・スタイルが“回避型”や“両価型”であれば、PSSとSOCが共に低いと推測される。また、大学生の経済的余裕を反映すると考えられる居住費と学費を除いた生活費（1ヶ月分）や、ソーシャル・サポート・ネットワークの豊富さは、SOCとそれぞれ有意な正の関連を示すと考える。

3) 本研究のオリジナリティ

本研究のオリジナリティは、①SOCとアタッチメント・スタイルの関連を検証する点、②SOCとPSSの関連の検証に際して大学生のソーシャル・サポート・ネットワークを踏まえサポート源とサポートの種類を考慮する点、③SOCと経済的要因との関連の検証に際して居住費や学費以外で自由に遣える生活費（1ヶ月分）を指標とする点の大きく3点と思われる。

II 方法

1. 調査対象者と実施方法

調査は、2004年7月中旬に公立大学2校の学部1-3年生521名を対象に行った。講義終了後に、個別記入方式の質問紙による集団配布集団回収方式で実施した。調査への参加は倫理的に考慮し、実施時に調査協力が自由意思であることやプライバシーが侵されることは決してないことを口頭で説明し、フェイスシートにも記載した。

記入漏れや記入ミスがあった回答を除いた有効回答者は490名（有効回答率94.0%：男性228名、女性262名）で、平均年齢は19.49歳（SD=1.00, range: 18-22）であった。なお分析には、統計処理ソフト「PASW statistics 18 for Windows」を使用した。

2. 質問紙の構成

質問紙は、フェイスシート（性別、学年、居住費と学費を除いた1ヶ月の生活費、大学入学までの家族構成）と、以下の3つの尺度を用いた。

Table 1 邦訳版SOC-29尺度の各下位尺度の項目数と項目例

下位尺度名	項目数	項目例
comprehensibility : 把握可能感 (理解できるか)	11(2)	あなたは、不慣れな状況の中にいると感じ、どうすればよいのかわからないと感じることがありますか？ あなたは、本当なら感じたくないような感情を抱いてしまうことがありますか？
manageability : 処理可能感 (対応できるか)	10(6)	あなたは、この先、誰か頼りにできる人がいつもいると思いますか？(R)※ あなたは、自制心を保つ自信がなくなることがありますか？
meaningfulness : 有意味感 (意味ややりがいを感じるか)	8(5)	あなたは、自分のまわりで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか？(R) あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じることがありますか？

注) ※を付した項目については「必ずいると思う(1)－いないと思う(7)」, 他の項目は「とてもよくある(1)－まったくない(7)」の7件法でそれぞれ回答を求めた。

項目数の()内は逆転項目の数を, Rを付した項目は逆転項目であることをそれぞれ示す。

1) 邦訳版SOC-29尺度

Antonovsky⁽⁵⁾が作成したSOC-29尺度を山崎⁽¹³⁾が邦訳した尺度で、国内外で信頼性や妥当性に関する詳細な検証が行われている^(7,14)。“把握可能感”“処理可能感”“有意味感”の3つの下位尺度からなる29項目7件法で、Antonovsky⁽⁵⁾にならぬ合計得点 (*range* : 29–203) を用いた。SOC得点が高いほど、ストレス対処と健康保持に関する能力が高いとされている。

本研究でのCronbachの α 係数は.85であり、国内の調査で報告されている本尺度の α 係数 (.85–.91) と比較しても⁽⁷⁾、統計解析に耐えうる十分な内的整合性が認められた。なお3つの下位尺度について、それぞれの項目数と項目例をTable 1に示した。

2) 青年・成人期のアタッチメント・スタイル尺度

個人が他者と自分の関係をどのようにとらえているのかについて、アタッチメント理論の観点から青年・成人期における3つのアタッチメント・スタイル次元 (“安定型” “両価型” “回避型” : 各6項目) を測定する18項目6件法の尺度である。詫摩・戸田⁽¹²⁾と戸田^(15,17)の調査を通じて作成された尺度で、内的一貫性は高く、併存的妥当性、構成概念妥当性が確認されている。

3) 大学生版家族・友人・恋人PSS尺度

福岡・橋本⁽¹⁸⁾の“知覚されたサポート尺度 (大学生・成人用)”の項目を参考に、“手段的サポート”に属する3項目を除いた9項目 (“情緒的PSS” “情動的PSS” “手段的PSS”) を大学生の日常生活の実情に即した文章表現に一部改変して使用した。サポート源には、大学生が普段接することが多く、主要なソーシャル・サポート・ネットワークとして想定される家族、友人、恋人の3者^(19,20)を設定し、サポート源ごとに5件法で評定した。恋人がいない場合は回答を求めず、家族、友人についてのみ回答を求めた。

以降、本尺度を“家族PSS尺度” “友人PSS尺度” “恋人PSS尺度”と各々略記する。なお論文中では統一して“恋人”という表現を用いるが、質問紙では“彼氏・彼女”という表現で訊ねた。

III 結果

1. SOCと基本的属性との関連

調査対象者 ($N=490$) のSOC得点の平均値は114.5点 ($SD=18.6$, *range* : 41–183) であった。サンプルに顕著な偏りのみられなかった性別、祖父母の有無、恋人の有無、学年については一元配置分散分析を行い、生活費との関連については相関分析により、SOCと基本的属性との関連を検証した。

性別 ($F(1,488)=.65$, *n.s.*) と学年 ($F(2,487)=1.54$, *n.s.*) で有意差はみられなかったが、祖父母と恋人の有無 ($F(1,488)=5.68$, $p<.05$; $F(1,488)=14.91$, $p<.001$) については、それぞれ平均値の差が有意で、祖父母、恋人がいる群の方がそれぞれSOCが高かった (Table 2)。生活費とSOCとの相関分析によるPearsonの積率相関係数では、有意な関連はみられなかった ($r=.07$, *n.s.*)。

Table 2 基本的属性におけるSOC得点の平均値と標準偏差

		<i>n</i> (%)	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> 値
性別	男性	228 (46.5)	113.72	19.85	.65
	女性	262 (53.5)	115.08	17.46	
祖父母の有無	有	304 (62.0)	116.01	17.73	5.68*
	無	186 (38.0)	111.90	19.72	
恋人の有無	有	220 (44.9)	118.00	19.06	14.91***
	無	270 (55.1)	111.56	17.74	
学年	1年生	154 (31.4)	112.28	20.27	1.54
	2年生	170 (34.7)	115.49	16.12	
	3年生	166 (33.9)	115.40	19.29	

* $p<.05$, *** $p<.001$

2. アタッチメント・スタイル尺度の因子分析と性差

アタッチメント・スタイル尺度について主成分分解による因子分析を行った結果、固有値の減衰状況と解釈可能性の観点から3因子解を妥当と判断した (累積寄与率 : 43.91%)。Promax回転後の各項目の因子負荷量より、本尺度を用いた先行研究^(12,15,16)の結果と同様の因子構造が認められたため、詫摩・戸田⁽¹²⁾にならぬ、第1因子を“安定型”、第2因子を“両価型”、第3因子を“回避型”と各々命名した。各因子の標準因子得点を算出し、以後の分析ではそれらの得点を使用することとした (各標準因子得点の*range* : -2.38–2.39, -2.70–2.39, -1.94–3.28)。

さらにアタッチメント・スタイル尺度で抽出された

3 因子についての性差を確認するためWelchの法による t 検定を行ったところ、“安定型” ($t(448.23) = 1.56, n.s.$) と“両価型” ($t(451.62) = 1.61, n.s.$) では有意差がみられなかったが、“回避型” ($t(402.38) = 4.51, p < .001$; 男性 > 女性) では有意差がみられた。感情表出の希薄さや親密さを拒否するといった特性と関連がある“回避型”は、女性に対し男性が高いという Bartholomew & Horowitz⁽²¹⁾ や金政・大坊⁽²²⁾ の報告と同様の傾向が本研究でも示された。

3. 家族・友人・恋人PSS尺度の因子分析と性差

家族、友人、恋人の各PSS尺度について主成分解による因子分析を行った結果、固有値の減衰状況と解釈可能性の観点からそれぞれ2因子解を妥当と判断した(累積寄与率: 52.34%, 47.46%, 50.49%)。Promax回転後、各PSS尺度ともに福岡・橋本⁽¹⁸⁾ の報告と同様の傾向を示したため、第1因子を“情緒的PSS”、第2因子を“手段的PSS”と命名した。アタッチメント・スタイル尺度と同様に、各因子の標準因子得点を算出し、以後の分析にはそれらの得点を用いた(各標準因子得点のrange: -2.09-1.62, -3.54-.94, -3.19-1.22, -2.76-1.65, -3.62-1.03, -3.17-1.25)。

各PSS尺度で抽出された2因子(計6因子)における性差を確認するため t 検定を行ったところ、6因子すべてにおいて男性よりも女性の平均値の方が有意に高かった ($t(488) = 8.44, p < .001$; $t(409.46) = 9.13, p < .001$; $t(378.25) = 9.04, p < .001$; $t(431.71) = 6.66, p < .001$; $t(146.21) = 4.77, p < .001$; $t(218) = 2.67, p < .01$: 検定結果は、“家族-情緒的PSS” “家族-手段的PSS” “友人-情緒的PSS” “友人-手段的PSS” “恋人-情緒的PSS” “恋人-手段的PSS” の順で記載した。なお分散の有意差の有無に応じてWelchの検定を行ったため、自由度が異なっている)。一般的に、PSSは男性に比べて女性の得点が高くなる傾向が多く、先行研究^(18,23-25) で明らかにされており、本研究でも先行研究の知見を支持する結果が得られた。

4. SOCとアタッチメント・スタイルおよび家族・友人・恋人からのPSSとの関連

SOCに関する性差については、一貫した知見は得られていないが⁽²⁶⁾、養育環境や所属する社会文化的環境によって期待される性役割の違いがSOCの発達に影響をおよぼしている可能性や、本研究の対象である大学生がSOCの発達途上にあること、加えて先の分析において、“回避型”とPSSの6因子で性差がみられていたことを考慮し、SOC、アタッチメント・スタイル、PSSの関連性の検証は男女別に行うこととした。

また成人期のアタッチメント研究において、アタッチメントによる個人差を次元論的にとらえるのか、あるいは類型論的にとらえるのかについての論議が続くなか、

現在では徐々に次元論的にとらえる流れへと移行しているが^(19,27)、依然双方のアプローチが混在する過渡期にある^(11,22)。そのため、本研究でも双方の観点から分析を行った。

アタッチメント・スタイルの類型論的アプローチによる分析を行う場合、得られたデータを基に調査対象をいずれかのアタッチメント・スタイルに分類する必要がある。詫摩・戸田⁽¹²⁾の尺度を用いて対象を各アタッチメント・スタイルに類型化する場合、一般的にアタッチメント・スタイル得点を指標として、その個人内でもっとも高い得点を得たアタッチメント・スタイルに分類する方法がこれまで多く用いられている。しかし、この手法では詫摩・戸田⁽¹²⁾が指摘する“混合型”を考慮できず、個人内のアタッチメント・スタイル得点の相对比较も充分に行えないという課題がある。そのため、個人の典型的なアタッチメント・スタイルをより厳密に特定するため、1つのアタッチメント・スタイル得点において全体の平均値以上で、かつ他の2つのアタッチメント・スタイル得点が全体の平均値以下であった場合にその対象を前者のアタッチメント・スタイルに分類するという金政・大坊⁽²²⁾の類型化手法を用いると共に、詫摩・戸田⁽¹²⁾が個人の中に複数のアタッチメント・スタイルが並存する可能性について言及していることを考慮し、いずれにも分類されなかった対象を“混合型”として位置づけた。

以上の手続きを踏まえ、調査対象を男女別で3つのアタッチメント・スタイル(安定型・両価型・回避型)に“混合型”を加えた計4類型にそれぞれ分類した。そして、SOCとアタッチメント・スタイル尺度で抽出された3因子、各PSS尺度から抽出された計4-6因子の間での相関分析(Table 3: アタッチメント・スタイルの次元論的アプローチ)と、アタッチメント・スタイル類型を独立変数とし、SOCならびに3者からの各PSSを従属変数とした一元配置分散分析(Table 4: アタッチメント・スタイルの類型論的アプローチ)を、それぞれ男女別に行った。

1) アタッチメント・スタイルの次元論的アプローチ

相関分析(Table 3)では、男女共にSOCとアタッチメント・スタイルの間に有意な相関が認められた。特に性別に関係なく“安定型”とSOCとの間に中程度の正の相関が、また“両価型”との間で中程度の負の相関がそれぞれみられた。“回避型”とSOCとの間では、男女それぞれ弱い負の相関が示された。SOCとPSSの関連はアタッチメント・スタイルほど強くはなかったが、男性で“友人-情緒的PSS”が、女性で“家族-情緒的PSS” “家族-手段的PSS”が、それぞれ弱いながらもSOCと有意な正の相関を示した。

アタッチメント・スタイルとPSSの関連については男女で異なる結果が示された。男性では、“安定型”と“家

Table 3 SOC, アタッチメント・スタイル次元因子, 各PSS因子の相関係数(男女別)

SOC	家族PSS		友人PSS		恋人PSS	
	情緒的PSS	手段的PSS	情緒的PSS	手段的PSS	情緒的PSS	手段的PSS
SOC						
男性(n=228)	.16*	.02	.23***	.15*	.04	-.01
女性(n=262)	.22***	.20***	.08	.10	.08	.13
ア タ ッ チ メ ン ト ・ ス タ イ ル						
安定型						
男性	.52***	.25***	.15*	.43***	.41***	.04
女性	.43***	.15*	.07	.24***	.22***	-.04
両価型						
男性	-.62***	-.04	.08	-.12†	-.10	.03
女性	-.65***	-.14*	-.12*	-.02	-.05	.01
回避型						
男性	-.30***	-.30***	-.30***	-.57***	-.51***	-.48***
女性	-.24***	-.07	-.13*	-.44***	-.36***	-.03

† p < .10, * p < .05, ** p < .01, *** p < .001

注) 男女の人数はすべて同じである。

Table 4 性別および各アタッチメント・スタイル類型のSOCと各PSS因子の平均値と標準偏差

性別 類型	n	男性 (n=228)				F値	女性 (n=262)				F値
		安定型	両価型	回避型	混合型		安定型	両価型	回避型	混合型	
SOC	Mean	130.00	102.62	113.96	109.06	19.18***	123.77	108.22	114.93	113.31	8.78***
	SD	16.93	14.01	14.12	20.23	安>回>両, 安>混	16.14	13.47	18.35	17.73	安>両=混
家族-情緒的PSS	Mean	-.09	-.26	-.56	-.42	2.71*	.51	.24	-.02	.29	1.89
	SD	.89	.82	.97	.82	安>回	.79	.83	.96	.94	
家族-手段的PSS	Mean	-.18	.02	-.61	-.43	3.50*	.39	.24	-.09	.35	2.41
	SD	.67	.64	1.07	.98	両>回	.59	.63	1.13	.65	
友人-情緒的PSS	Mean	.30	-.23	-.93	-.51	13.41***	.65	.43	-.38	.25	12.64***
	SD	.78	.75	1.23	.99	安>回=混, 両>回	.50	.58	.67	.71	安>混>回, 両>回
友人-手段的PSS	Mean	.27	-.08	-.64	-.37	11.12***	.53	.21	-.41	.15	9.94***
	SD	.74	.54	.93	.84	安>回=混, 両>回	.60	.58	.51	.71	安>混>回, 両>回
恋人-情緒的PSS	Mean	.04	-.01	-.70	-.54	2.42	.22	.31	-.17	.31	.94
	SD	.88	.62	1.15	1.15		.88	.62	1.09	.65	
恋人-手段的PSS	Mean	.18	.22	-.57	-.30	3.15*	.10	.35	-.37	.15	1.33
	SD	.82	.63	1.07	.90	安>回=混, 両>回	.72	.79	.89	.79	

* p < .05, *** p < .001

注) 多重比較(TukeyのHSD)により求めた類型間の有意差は、F値の下に「安定型=安, 両価型=両, 回避型=回, 混合型=混」と略記し、不等号を用いてそれぞれ示した(p < .05)。

PSS得点については数値が大であるほど、より多くのサポートを知覚していることを示す。nの()内の数字は恋人がいる人の人数を示した。

族-情緒的PSS”の間で弱い正の相関が、また“友人-情緒的PSS”“友人-手段的PSS”との間で中程度の正の相関がそれぞれみられた。逆に“回避型”と“家族-情緒的PSS”“家族-手段的PSS”の間に弱い負の相関が、友人、恋人からのPSSすべてと中程度の負の相関がそれぞれ示された。一方、女性では、“安定型”と“友人-情緒的PSS”“友人-手段的PSS”との間に弱い正の相関が、“回避型”と“友人-情緒的PSS”“友人-手段的PSS”との間に中程度から弱い負の相関がみられた。“両価型”とPSSの関連については、男女共に有意ではあっても非常に弱い相関しかみられなかった。

2) アタッチメント・スタイルの類型論的アプローチ

分散分析 (Table 4) の結果では、男女共にSOCにつ

いて要因の効果が有意であり (F (3,224) =19.18, p <.001; F (3,258) =8.78, p <.001), 多重比較の結果“安定型”のSOC得点をもっとも高く、“両価型”と“混合型”のSOC得点が低いという共通した傾向がみられた。PSSにおける要因の効果については、男女で共通点と相違点がみられた。共通点としては、“友人-情緒的PSS”“友人-手段的PSS”において、男女共に“安定型”をもっとも高く、“回避型”をもっとも低く、“両価型”と“回避型”とを比較すると“両価型”が“回避型”よりも有意に高かったことが挙げられる。相違点としては、家族や恋人のPSSについて、女性ではいずれも要因の効果が無かったのに対し (F (3,258) =1.89, n.s.; F (3,258) =2.41, n.s.; F (3,127) =.94, n.s.; F

(3,127) = 1.33, *n.s.*), 男性では, “家族-情緒的PSS” “家族-手段的PSS” “恋人-手段的PSS” について要因の効果が有意であったことが挙げられる ($F(3,224) = 2.71, p < .05$; $F(3,224) = 3.50, p < .05$; $F(3,85) = 3.15, p < .05$)。多重比較の結果, “家族-情緒的PSS” では “安定型” が “回避型” より有意に高く, “家族-手段的PSS” では “両価型” が “回避型” より有意に高かった。“恋人-手段的PSS” では, “安定型” と “両価型” が “回避型” よりもそれぞれ有意に高かった。

IV 考察

1. SOCと大学生の経済的余裕との関連

本研究の目的は, 成人前期にあたる大学生を対象に健康生成論の中核概念であるSOCと, アタッチメント・スタイル, PSSおよび代表的なデモグラフィック要因との関連性を検討し, SOCの発達に寄与する要因の解明に向けた基礎的な知見を得ることにある。

今回の調査では大学生の1ヶ月の生活費とSOCとの間に有意な関連はみられなかった。これは本調査で「居住費と学費を除いた1ヶ月の生活費(家族と同居している場合には, 1ヶ月の小遣いやアルバイト代を合計した金額)」の回答を求めたことで, 大学生以外の対象がストレスへの対処のために活用する資源(GRRs)というより, 本研究対象の大学生が月々に自由に遣える経済的な余裕を反映していることが考えられ, 大学生生活を最低限維持できるだけの経済的環境を整えば, それ以上の経済的余裕は大学生のSOCの発達と有意に関連しない可能性が示唆されたと考えられる。

しかし, 両親の職業や収入といった家庭の社会経済的状態はSOCの発達にとって重要なGRRsであるとされており^(2,5,6,26), 今後も実証的な知見を蓄積していく必要がある。国内外においてGRRsにおける社会経済的要因(最終学歴, 両親の職業, 自分や家族の所得状況, 雇用形態など)とSOCの関連に着目した研究は極めて少なく, 特に20-30歳代の人々を対象とした研究は, 国内では戸ヶ里・山崎⁽²⁸⁾が報告している程度である。戸ヶ里・山崎⁽²⁸⁾は, 20-40歳代の人々において学歴や雇用形態をはじめとした社会経済的地位の上下によりSOCが規定されるというAntonovsky⁽⁵⁾の理論的仮説を支持する結果が得られたことから, 低所得層や劣悪で不安定な雇用環境にある人々への政策的示唆も行っている。2008年9月に米国の名門投資銀行であるリーマン・ブラザーズの破綻をきっかけに, 世界的な金融危機(リーマン・ショック: Lehman shock)が生じて以後, 日本経済や家計所得への影響も非常に大きく, 突然のリストラや就職・雇用情勢の悪化などの社会経済的格差が拡大している昨今は, SOCの発達や健康状態にも格差が生じやすい社会情勢にあると考えられる。

本研究で定義した経済的要因とSOCとの間には有意な関連がみられなかったが, 今後も社会経済的状態とSOCとの関連についての詳細な検討を行い, よりSOCの発達に望ましい環境作りに向けた包括的提言を行っていく必要があると考える。

2. SOC, アタッチメント・スタイル, PSSの関連

SOC, アタッチメント・スタイル, PSSの関連の検証では, 男女で共通点と相違点がみられた。男女ともに, SOCと “安定型” との間には有意な正の関連が, また “両価型” との間には有意な負の関連が見られた。アタッチメント・スタイルが “安定型” であればストレス下にあってもソーシャル・サポートを活用したり, 積極的に援助を求めていくことでより適応的かつ効果的に対処できる経験が蓄積され, その結果SOCも発達しやすいと考えられる。一方, “両価型” の場合は, 援助を求めたいという欲求は強いものの, その欲求に周囲や環境が応じてくれることへの不信感が強く, 結果としてソーシャル・サポートの知覚に繋がりにくく, SOCの発達が阻害されやすいと推測される。本研究の結果は, これまでの成人期のアタッチメント研究において “安定型” の場合, 困ったときに家族や友人たちがサポートしてくれるであろうという期待を抱いており, 適応的で精神的健康を維持しやすいが, “両価型” では周囲から適切にサポートを得られないのではないかという不安が強く, ネガティブな感情体験をしやすいという知見^(11,22)とも一致するものであった。

SOC, アタッチメント・スタイル, PSSの関連についてより詳細な検討を行うため結果を性別ごとにみると, 男性でSOCと “安定型” が中程度の正の関連を示し, かつ “安定型” と家族からの “情緒的PSS” や友人からの “情緒的PSS” と “手段的PSS” の間に正の関連が示された点は性別役割の影響が考えられる。日本でも男性には自分のことは誰かに頼らず自分で対処したり, 独立的で「頼もしい」「力強い」といった “性別役割ステレオタイプ” が強調され⁽²⁹⁾, 誰かにサポートを求めたり, 実際にサポートを受けることが「弱いこと」や「恥ずかしいこと」とネガティブにとらえられがちである。男性のSOCと “安定型” との間に正の関連がみられたということは, 日本文化における “性別役割ステレオタイプ” にとらわれ過ぎず, また家族や友人からサポートを受けることを「弱いこと」や「恥ずかしいこと」とネガティブにとらえずに援助を求めたり, 相互依存性やサポートを受ける自分を受け入れていることが, 特に男性のSOCを高める上で重要である可能性を示唆していると考えられる。

一方, 女性ではSOCと家族からの “情緒的PSS” と “手段的PSS” がそれぞれ弱いながらも有意な正の関連を示していた。このことから, 男性の場合, 友人からの “情

緒的PSS”がSOCの発達に重要であると考えられるのに対して、女性の場合は家族からのソーシャル・サポートがSOCの発達にとって重要であることが推測される。

男女の共通点として、“友人—情緒的PSS”“友人—手段的PSS”について、“安定型”がもっとも高く、次に“両価型”“混合型”が位置づけられ、“回避型”がもっとも低かったことが挙げられる。家族や恋人からのPSSについては、アタッチメント・スタイルの影響に男女差がみられるものの、友人からのPSSには性差に関係なくその個人のアタッチメント・スタイルが反映され易い可能性が示唆されたと考えられる。このことから、個人のアタッチメント・スタイルを検討する場合、家族や恋人からのサポートの知覚については性差を考慮する必要性は高いが、友人からのサポートの知覚については、それほど性差を考慮する必要はないと考えられる。

また“安定型”や“両価型”と比べると、“回避型”のアタッチメント・スタイルは男女共にSOCとの関連は弱く、分散分析の結果からでもSOC得点が“安定型”と“両価型”の間に位置づけられる点で共通していた。さらに男性では家族、友人、恋人からの“情緒的PSS”と“手段的PSS”，女性では友人の“情緒的PSS”と“手段的PSS”で“回避型”と中程度から弱い負の関連をそれぞれ示す結果となり、PSSとの関連に性差がみられた。

“回避型”では、ソーシャル・サポートを求めにくかったり、普段から周囲のサポート源に頼らず自分自身でストレスに対処しようとするにより個人で対処する能力は高まったとしても、自らの資源やコーピング能力を上回り周囲の助けを要する状態に対処することの難しさが課題となり、SOCが“両価型”よりも高いが“安定型”よりは低いという結果につながったのではないかと考えられる。さらに本研究の結果からは“回避型”のアタッチメント・スタイルによるサポートの求めにくさには性差があることが示唆され、男性では家族、友人、恋人など幅広いサポート源に対してサポートを求めにくく、女性では特に友人関係においてサポートを求めにくいと考えられる。

以上のことから、男性ではSOCの強さやアタッチメント・スタイルが“安定型”であることが、家族や友人からのソーシャル・サポートの知覚量の多さとして反映したり、友人からの“情緒的PSS”がSOCの発達にとって促進的に作用している可能性と、一方、女性ではSOCの強さとアタッチメント・スタイルが“安定型”であることが、男性と比較するとソーシャル・サポートの知覚量の多さとしては反映しにくく、SOCの発達にとっては家族からの“情緒的PSS”と“手段的PSS”が促進的に作用する可能性がそれぞれ示唆された。また性差に関係なく、友人からのソーシャル・サポートの知覚にその個人の典型的なアタッチメント・スタイルが反映され易い可

能性が示唆されたと考えられる。

本研究ではSOC、アタッチメント・スタイル、PSS間の関連の検証について、アタッチメント・スタイルの次元論と類型論の双方の観点から行った。その結果、次元論的アプローチ（相関分析）によって3つの変数間の関連の強弱が把握でき、類型論的アプローチ（分散分析）によってSOCとPSSについての各アタッチメント・スタイル間の差について明確に把握できたというメリットが示された。次元論的アプローチのみでは、各アタッチメント・スタイルとSOCやPSSとの関連の強弱の把握までは難しく、2つのアプローチを用いることで3変数の関連について相補的かつ多面的に検証ができたと考えられる。しかし、各アタッチメント・スタイル尺度間の関連の検証⁽³⁰⁾はなされてはいるが、現在もアタッチメント・スタイルの類型化に関する明確な基準や方法論が定まっていないだけでなく、近年、中尾・加藤^(19,27)によって海外で開発されたアタッチメント・スタイル尺度（Experiences in close relationships inventory：ECR）の日本語版の作成、および信頼性、妥当性の検証が行われ、その尺度を用いた実証研究も蓄積し始めている。したがって、質問紙法を用いた成人期のアタッチメント・スタイル研究におけるより適切な類型論モデルの理論化や統計解析手法を確立していくことが今後の重要な課題であると考えられる。

3. SOCとソーシャル・サポート・ネットワークとの関連

本研究ではPSSだけでなくソーシャル・サポート・ネットワークとSOCの関連も検証した。サンプルの偏りから、両親や兄弟姉妹の有無との関連についての検証は行えなかったが、祖父母と恋人の有無とSOCとの関連について検証を行うことができた。その結果、祖父母と恋人がSOCの発達に促進的に作用している可能性が示唆され、サポート源を多く有している人のSOCが高い傾向を示すという先行研究の知見^(5,8,10,26)を支持する結果となった。

祖父母の存在とSOCとの関連については、調査時に同居か否かに関わらず「家族と思う人」として家族構成を訊ねたため、祖父母がSOCの発達にどのような影響をおよぼしているかは明らかになっていない。祖父母が直接的に子育てをサポートすることが影響しているのか、あるいは両親に対し子育ての助言を行ったり、金銭的な援助を行うといった間接的なサポートを介してSOCの発達に影響をおよぼしているのか、さらに祖父母の存在によって親戚や地域との結びつきが強まることでより多くのソーシャル・サポート・ネットワークを知覚しやすくなるのか、といったさまざまな可能性が考えられるが、今後は祖父母がSOCの発達にどのような過程・作用を経てポジティブな影響を与えているのかを明らかにしていくことも有益と考えられる。国内外で、家庭の社会経済的

状態や両親の職業、学業成績、家族以外のソーシャル・サポート・ネットワークの広さなどの要因とSOCとの関連に関する検証は行われているが^(10,26,31,32)、祖父母の存在や、核家族・拡大家族といった家族形態とSOCとの関連を検証した研究は見当たらず、今後の課題であると考えられる。近年、全国で祖父母との同居率が23-24%と低下傾向が続いている点や今後ますます核家族化が進むことが予想される点⁽³³⁾を考慮すると、祖父母がSOCにおよぼす影響過程を明らかにすることで、SOCを高める祖父母からのサポートや関わりを補うための対応についての示唆や、SOCの発達を促進する要因に関する有益な知見が得られることも考えられる。

SOCと恋人の関連については、恋人のPSSとSOCとの間に有意な関連は示されなかったが、木村ら⁽¹⁰⁾の報告と同様に、恋人がいる群の方が恋人がいない群よりもSOCが有意に高かった。以上の結果から、Antonovsky⁽⁶⁾がSOCの発達に寄与する重要な存在として“信頼のおける他者 (legitimate others)”の必要性を主張したが、大学生にとっては恋人が信頼のおける主要な他者となりSOCの発達に促進的に作用している可能性が示唆されたと考えられる。本研究では恋人の存在がどのような影響をおよぼすことでSOCの発達に寄与しているのかまでは明らかにすることはできなかったが、恋人を困ったときの援助者にとらえるだけでなく、恋人との関係構築が個人の人生にとって有意義で価値ある体験となったり、互いに1人では困難なことでも協力することで乗り越えられる体験の蓄積となり、SOCの構成要素である有意味感や処理可能感を高めることも推測される。近年、国内で恋人の存在の有無だけではなく、失恋した経験へのコーピングや失恋後にかつて恋人だった相手をどうとらえているかがSOCの高低に影響をおよぼしているという報告⁽³⁴⁾もなされており、今後は恋人の有無だけでなくその関係や恋愛経験の質とSOCとの関連に焦点化した数量的・質的研究を蓄積していくことで、恋人がおよぼすSOCへの影響をより詳細に明らかにしていくことが必要と考える。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究から、①男女共にSOCとアタッチメント・スタイルの関連は強く、アタッチメント・スタイルが安定的であるほどSOCが高く、両価的であるほどSOCが低いこと、②ソーシャル・サポート・ネットワークにおいて恋人と祖父母の存在がSOCの発達に促進的に寄与している可能性があること、③男性の場合は友人からの情緒的サポートが、女性の場合は家族からの情緒的サポートや手段的サポートがそれぞれSOCの発達に寄与している可能性があることの大きく3点が明らかになった。

本研究の限界として、成人前期にあたる大学生を調査対象としたが、年代や属性、文化の違いといった要因を考慮せずに結果を一般化することには慎重でなければな

らないことと、本研究が相関研究であるため因果関係について論じることはできないという大きく2点が挙げられる。たとえば生育時から児童期、思春期などにおける生活環境が現在のSOCに影響をおよぼしている可能性は十分に考えられ、各発達段階でどのような要因がどれほどの影響をもたらすのかを実証的に解明していく必要があると考えられる。

戸ヶ里ら⁽³⁵⁾はSOCの発達を促す要因やSOCを高めるための働きかけを探る目的で、高校生1,539名を対象として10ヶ月間に亘る縦断的な調査研究を実施している。その結果、小・中学校時代の部活動経験が充実していたり、友人関係が良好で分かり合える友人が多いことがSOCの発達にポジティブな影響をおよぼしている可能性が示唆されている。また蝦名⁽³⁶⁻³⁸⁾はSOCを高める関連要因を探る目的で旧ユーゴ紛争の舞台となったクロアチアにおいて、紛争時に15-23歳だった女性17人にインタビュー調査を行った。その結果、SOCが高い人々には、共通して紛争で亡くした大事な人の遺志を継承していこうとする意思の強さがみられ、蝦名⁽³⁶⁻³⁸⁾は死や病気といった避けがたいストレスに曝される当事者や医療従事者に健康生成論が応用できる可能性を指摘している。

以上の研究成果や、近年山崎ら⁽²⁶⁾や山崎・戸ヶ里⁽³⁹⁾によって日本にも紹介されたSOC向上プログラム^(40,41)を踏まえながら、今後はSOCの発達に寄与する要因の更なる解明とともに国内においてもSOCを高めるための教育実践、介入プログラムの開発に向けて、成人期以降に限らず児童・思春期も含めた人々を対象とした縦断研究ならびに質的研究の蓄積も必要と考える。

SOCは周囲の人々や環境との相互依存関係における自己概念をベースとした健康保持能力であるため、周囲の人々と環境と対峙する自己の影響力やコントロール感を高めることが適応的とされる欧米圏よりも、アジア圏での研究蓄積への期待と関心が寄せられてきた^(5,13,26)。同じアジア圏ではあっても養育環境や慣習、文化的自己観も含めてアジア各国においても文化的差異はみられるため、日本人を対象としたSOC研究が必要と思われる。しかし、国内におけるSOC研究の蓄積は未だ発展途上であり^(8,9,26)、とりわけ教育学や臨床心理学の領域においてはほとんどなされていない。今後、日本においても健康生成論やSOCに基づく広範な実証研究の蓄積と実践分野への適用が期待される。

— 付 記 —

本研究は、日本心理学会第69回大会において発表したものを再分析および加筆・修正したものである。調査を行うにあたり、快く御協力いただいた先生方ならびに調査協力者の皆さんに深く御礼を申し上げる。

－ 文 献 －

- (1) Holmes, T. H. & Rahe, R. H. The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, Vol.11, pp.231-238, 1967
- (2) Antonovsky, A. *Health, stress, and coping: New perspective on mental and physical well-being*. San Francisco: Jossey-Bass, 1979
- (3) Kickbush, I. Tribute to Antonovsky: What creates health? *Health Promotion International*, Vol.11, pp.5-6, 1996
- (4) 穴井千鶴・園田直子・津田 彰「健康生成論とポジティブ心理学—育児支援によるコミュニティ介入—」島井哲志（編）『ポジティブ心理学—21世紀の心理学の可能性—』ナカニシヤ出版, pp.223-240, 2006
- (5) Antonovsky, A. *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*. San Francisco: Jossey-Bass, 1987 (山崎喜比古・吉井清子（監訳）『健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム—』有信堂, 2001)
- (6) Becker, C.B. 「SOCの現状とスピリチュアル教育の意味」Becker, C.B.・弓山達也（編）『いのち教育スピリチュアリティ』大正大学出版会, pp.101-138, 2009
- (7) 戸ヶ里泰典・山崎喜比古「SOCスケールとその概要—SOCスケールの種類と内容・使用上の注意点・課題—」『看護研究』42, pp.505-516, 2009
- (8) 湊 千枝「Sense of Coherence研究の現状と課題—邦文研究を中心に—」『法政大学大学院人間社会研究科臨床心理相談室報告紀要』6, pp.57-65, 2009
- (9) 山崎喜比古「ストレス対処力SOC (sense of coherence) の概念と定義」『看護研究』42, pp.479-490, 2009
- (10) 木村知香子・山崎喜比古・石川ひろの・遠藤雄一郎・萬代優子・小澤恵美・清水準一・富永真己・藤村一美・柿島有子・加藤礼子・田村麻紀・土居主尚・山口哲男・吉野 亨「大学生のSense of Coherence (首尾一貫感覚, SOC) とその関連要因」『日本健康教育学会誌』9, pp.37-48, 2001
- (11) Rholes, W. S. & Simpson, J. A. (eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press, 2004 (遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志（監訳）『成人のアタッチメント—理論・研究・臨床—』北大路書房, 2008)
- (12) 詫摩武俊・戸田弘二「愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—」『東京都立大学人文学報』196, pp.1-16, 1988
- (13) 山崎喜比古「健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC」『Quality Nursing』5, pp.825-832, 1999
- (14) Eriksson, M. & Lindström, B. Validity of Antonovsky's sense of coherence scale: A systematic review. *Journal of Epidemiology and Community Health*, Vol.59, pp.460-466, 2005
- (15) 戸田弘二「青年後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説 (working models) からの検討」『日本心理学会第52回大会発表論文集』pp.27, 1988
- (16) 戸田弘二「青年後期における基本的対人態度と愛着スタイル (2) —対人認知場面における情報処理の違い—」『日本教育心理学会第31回総会発表論文集』pp.198, 1989
- (17) 戸田弘二「女子青年における親の養育態度の認知とInternal Working Modelsとの関連」『北海道教育大学紀要 (第1部C)』41, pp.91-100, 1990
- (18) 福岡欣治・橋本 幸「大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果」『心理学研究』68, pp.403-409, 1997
- (19) 中尾達馬・加藤和生「“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討」『九州大学心理学研究』5, pp.19-27, 2004
- (20) 嶋 信宏「大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究」『教育心理学研究』39, pp.440-447, 1991
- (21) Bartholomew, K. & Holowitz, L. M. Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.61, pp.226-244, 1991
- (22) 金政祐司・大坊郁夫「青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響」『社会心理学研究』19, pp.59-76, 2003
- (23) 福岡欣治・橋本 幸「大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係」『教育心理学研究』43, pp.185-193, 1995
- (24) 嶋 信宏「大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果」『社会心理学研究』7, pp.45-53, 1992
- (25) 上田純子・橋本 幸「大学生のソーシャル・サポートネットワークの測定に関する一研究」『教育心理学研究』39, pp.440-447, 1993
- (26) 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子（編）『ストレス対処能力SOC』有信堂, 2008
- (27) 中尾達馬・加藤和生「成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語作成の試み」『心理学研究』75, pp.154-159, 2004

- (28) 戸ヶ里泰典・山崎喜比古「ストレス対処能力SOCの社会階層間格差の検討—20歳～40歳の若年者を対象とした全国サンプル調査から—」『社会医学研究』26, pp.45-52, 2009
- (29) 安達喜美子「身体の発達が青年の心に及ぼす影響」詫摩武俊(編)『基礎青年心理学』八千代出版, pp.36-42, 1988
- (30) 中尾達馬・加藤和生「成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?—4カテゴリー(強制選択式, 多項目式)と3カテゴリー(多項目式)との対応性—」『九州大学心理学研究』4, pp.57-66, 2003
- (31) Sagy, S. & Antonovsky, H. The development of the sense of coherence: a retrospective study of early life experience in the family. *Journal of Aging and Human Development*, Vol.51, pp.155-166, 2000
- (32) 戸ヶ里泰典「20～40歳の成人男女における健康保持・ストレス対処能力sense of coherenceの形成・規定にかかわる思春期及び成人期の社会的要因に関する研究」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』5, 2008
- (33) 内閣府『平成19年版 国民生活白書—つながりが築く豊かな国民生活—』時事画報社, 2007
- (34) 浅野良輔・堀毛裕子・大坊郁夫「人は失恋によって成長するのか—コーピングと心理的離脱が首尾一貫感覚に及ぼす影響—」『パーソナリティ研究』18, pp.129-139, 2010
- (35) 戸ヶ里泰典・小手森麗華・山崎喜比古・佐藤みほ・米倉佑貴・熊田奈緒子・榊原(関)圭子「高校生におけるSense of Coherence (SOC) の関連要因の検討—小・中・高の学校生活各側面の回顧的評価とSOCの10ヶ月間の変化パターンとの関連性—」『日本健康教育学会誌』17, pp.71-86, 2009
- (36) 蝦名玲子「健康生成論」に学ぶ ストレスにどう対処する? 旧ユーゴを生き抜いた女性たちのインタビューより(第1回)首尾一貫感覚を高める要因」『看護学雑誌』67, pp.678-682, 2003
- (37) 蝦名玲子「健康生成論」に学ぶ ストレスにどう対処する? 旧ユーゴを生き抜いた女性たちのインタビューより(第2回)首尾一貫感覚を高める要因」『看護学雑誌』67, pp.786-790, 2003
- (38) 蝦名玲子「健康生成論」に学ぶ ストレスにどう対処する? 旧ユーゴを生き抜いた女性たちのインタビューより(第3回)首尾一貫感覚を高める要因」『看護学雑誌』67, pp.934-938, 2003
- (39) 山崎喜比古・戸ヶ里泰典「SOC (sense of coherence) を高める介入方策の開発に向けて」『看護研究』43, pp.161-172, 2010
- (40) Langeland, E., Riise, T., Hanestad, B. R., Nortvedt, M. W., Kristoffersen, K., & Wahl, A. K. The effect of salutogenic treatment principles on coping with mental health problems: A randomized controlled trial. *Patient Education and Counseling*, Vol.62, pp.212-219, 2006
- (41) Langeland, E., Wahl, A. K. Kristoffersen, K., & Hanestad, B. R. Promoting coping: Salutogenesis among people with mental health problems. *Informa Health Care Issues in Mental Health Nursing*, Vol.28, pp.275-295, 2007